



とーりまかし
プロジェクト
レポート

農村を舞台にした 2つの実証事業で農業観光の 可能性が見えてきた！

JRCではこれまで、農村観光化を目指す2つの実証事業を実施。
過疎の村、奈良県・十津川と東京近郊の農業地域、千葉県・成田という、
異なる特徴を持つ2地域でそれぞれに見えてきた成果をまずはご紹介しよう。

とーりまかしプロジェクトとは

旅行や観光地の抱える課題を解決に導くために、知恵や専門家を提供することによって「試行実験」を行うプロジェクト。その結果は実施した観光地に活用していただくとともに、本誌上で発表し、同じ課題や興味を持つ他の地域に参考にしていただき、旅行業界の活性化に貢献することを目指しています。

Case I

奈良県庁 協働 プロジェクト

過疎地と都市部を結ぶ

「幸せのブリッジ」プロジェクト

活気を失った過疎の村には、都会生活に疲れた子どもや若者を癒す
美しい自然と人の優しさがある。観光という橋で両者を結んだとき、
そこに表れた成果と、成功のためのポイントとは。

背景

観光で過疎の村を活性化し 都市生活者に癒しを提供する

「過疎地」とは一般的に、人口が長期間にわたって減少している地域を指す。共通する課題は、若者の都市部への流出↓高齢化↓労働人口の減少↓地域産業の衰退↓税金の不足↓地域の不活性化というネガティブスパイラルだ。一方、商業が発展し、労働人口の多い「都

市部」の問題は、人々が長時間労働や人間関係の希薄さから心にゆとりをなくしつつあること。観光庁の調査結果によれば、長時間労働や職場での仕事の調整の難しさを感じている人は多く、ゆとりのなさが見て取れる(図2)。小5〜高2までの子どもへの調査でも、

半数以上が「疲れやすい」「忙しい」と回答している現状がある(図3)。本プロジェクトは、このような過疎地と都市部の課題を観光で結び、過疎地には活気を取り戻し、都市部の人にはリセットの機会を提供することを目的に始まった。過疎地の活性化を図るには、都市部からの継続的な人の流れを作ることが必要だ。観光でこれを実現するためには、都市部の人々に

過疎地の魅力に共感してもらい、繰り返し足を運んでもらうのも有効。そこで、実際に複数回のモニタープランを企画、実行して成功のポイントを探ることとした。モデル地域は、奈良県十津川村の神納川地区。最も近い都市部からでもバスで2時間かかり、携帯電話も通じない40世帯110名のは、都市部の人々が共感できる

今あるものを活かし
地域に合う客を迎えよう

観光行政というと、とかく「観光して稼ぐ」ことに目が向き

キーマンに
聞く



奈良県文化観光局
ならの魅力創造課
主任調整員
福野博昭氏

行政の立場から県内の過疎地振興に取り組む。今回の事業でもたびたび現地へ足を運び、地元の説得や指導に大きな役割を果たした。

が。しかし、施設や道路を整備して過度に観光化を進めれば、地域の生活も変わってしまう。それよりも、今ある風景や生活、人を活かし、地域に

持続的な収入をもたらす交流が生まれることが理想的。そのためにはまず、地域にふさわしいお客さんを迎えること。幸い最近には旅に対する価値観も多様化して、神納川のような集落を「昔ながらの日本が見られたい」という人も増えてきました。神納川地区としては、そういうお客さんに来ていただければいいのです。そもそも地

域振興とひとくくりにして、単一のモデルプランを当てはめるのは無理。今回の2つの実証事業でも、自給自足の神納川と出荷農家がメインの成田ではやるべきことが全く違うし、同じ村内でも十津川温泉であれば全く別のアイデアが必要です。大切なのは、型にはめるために欠点を直すのではなく、長所を活かすことではないでしょうか。

地域振興を考える行政マンは、つい地域を「変える」ことを考えたくなりますが、大切なのは住民の今の生活を守ることです。そのためにはまず、地域の中に入り、住民と目線を揃えて考えること。同時に、そんな自分を客観的に見て冷静に戦略を立てることも不可欠。それは適度に「よそ者」である我々だからこそできることなのです。



熊野古道を散策するツアー参加者たち。地域の魅力を探索するには、近隣の観光スポットも含めて考えてみたい



都市部の子どもにとっては農作業が珍しいだけでなく、おばあに「よくできた」と褒めてもらうことも喜びになる

年末のしめ縄作りは、村では日常的な仕事だが都市部の人にとっては新鮮。地域の人だけでは気づかない魅力だ



地域の魅力探し。しかし、地元からは地域の魅力はなかなか挙がらない。どんなに美しい川や星空も、地元住民にとってはただの川であり星ではないからだ。プロジェクトは「奈良県文化観光局ならの魅力創造課」、「十津川村づくり推進課」、「神納川HBP(地元協議

会)」とJRCの4者によるチームで進められたが、魅力探しの作業では、とりわけ地域外のスタッフの目が役に立った。結果、洗い出された魅力とは、自然や景観では星、川、近くを通る熊野古道、食では猪鍋やめはり寿司、体験では川遊びや田植え、

図1 十津川村の世帯数および人口推移グラフ

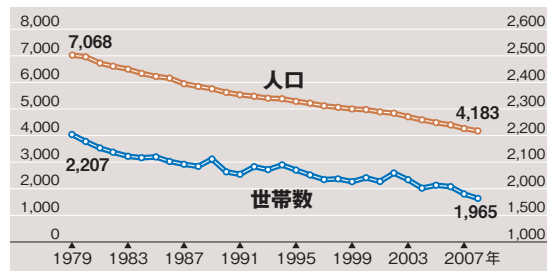


図2 都市部の人はゆとりをなくしている

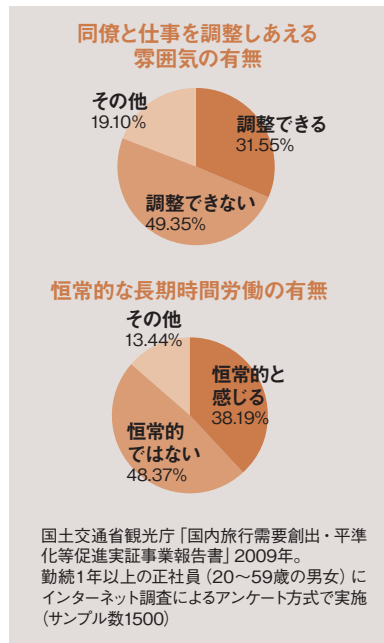
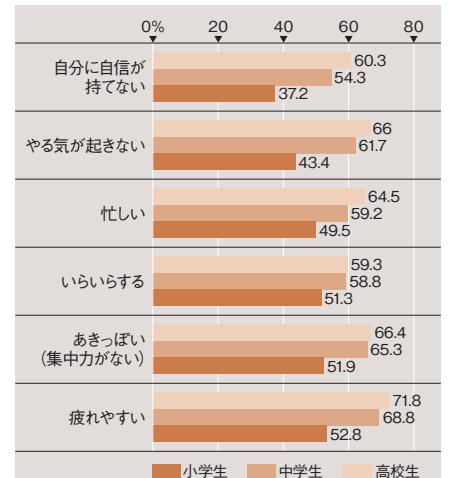


図3 子どもたちの心や身体の疲れ



Benesse教育研究開発センター「放課後の生活調査 子どもたちの時間の使い方(意識と実態)速報版」2008年

ステップ

1

「お客さん」を受け入れ

子ども農山漁村交流プロジェクト 3泊4日プラン

子どもたちの心を捉えた
いつもの川での水遊び

については、飲食業法の許可の不要な調理体験形式をとるなど負担を減らす工夫もした。

第一回のプランは小学生を対象に企画。総務省・農水省・文科省による「子ども農山漁村交流プロジェクト（※）」の制度を活用し、都市部で生活する小学校5・6年生48名を受け入れた。

宿泊は少人数ごとの民泊。当初は料理の負担、ケガや病気への懸念、民泊許可等の手続きの煩雑さから消極的な住民が多かったが、消防関係者による救命救急研修や、保健所からの食品衛生指導等を実施して少しずつ不安を払拭。食事

農業体験についてはかなり多彩に盛り込んだが、最も人気があったのは川遊び。地域の日常的な遊びが、都市部の子どもには貴重であることを示す結果となった。モニター後の感想（左下囲み参照）

からも、手をかけた体験内容より人や生活など農村の日常体験が印象的だった様子がうかがえる。

ちなみにその後この学校の運動会に住民が応援に行ったり、子どもが両親と遊びに来るなど交流も継続。民泊機能も維持されている。



水のきれいさと冷たさに子ども達は夢中。川岸に上がって休んでいる子は皆無だった



体験内容は農作業を中心に用意。特別な内容ではなく日常の作業こそが子どもには楽しいアトラクションになる



竹の器を作るためのこぎり作業に挑戦。「初めてのこぎりを使った」という子ども

第1回プラン内容

実施日 2008年8月26日～29日

【1日目】

13:00 入村式（アイスブレイキング）
15:00 立木伐倒見学・丸太切り
18:00 各農家にて夕食・団らん

【2日目】

06:00 起床、めはり寿司・茶がゆ作り
08:30 世界遺産小辺路ウォーク出発
15:00 十津川温泉入浴
18:00 各農家にて夕食・団らん

【3日目】

09:00 竹箨・竹器作り、
稲刈り、餅つき
13:00 川遊び、川虫採集
19:30 星空観賞

【4日目】

09:00 竹製紙鉄砲作り、シイタケ採り
12:00 離村式 帰路へ

【価格】 個人負担額3000円
（補助金制度利用のため）

【宿泊】 農家民泊（10軒に分宿）



離村式では感極まって泣き出す子ども。農村の「人」の存在意義の大きさが感じられた

モニターを終えて ひと言！

【子どもたちから…】

- よその家に泊まるのは緊張したけど、家の人が優しくて家族みたいだった
- 川遊びが一番楽しく、もっと遊んでいたかった
- 日頃の疲れがいやされた
- 十津川村へ引越したくなった

【先生たちから…】

- 子どもたちから挨拶ができるようになった
- 不登校がちの子の欠席率が減少した
- 本物の体験、人の優しさにふれあい十津川村が子どもたちの第二の故郷になったような気がする

【地元から…】

- 初めての経験に戸惑いや不安もあったが、子どもらが可愛くて毎日が楽しかった
- 子どもたちの笑顔に元気をもらった
- 後から届く子ども達からの手紙でまだ余韻に浸っている

※小学校単位で子どもを農山漁村に宿泊させ、生活を体験させるプログラム。十津川村も受け入れモデル地域として登録した。

第3回プラン内容

実施日 2009年3月20日～22日

【1日目】

10:00 貸切バスで大阪梅田～現地へ
12:30 経由地・葛城山麓でランチ
16:00 農家に到着、のんびり
19:00 夕食後、各農家で団らん・就寝

【2日目】

08:00 朝食・茶がゆ作り
10:30 世界遺産熊野古道散策
12:00 山の上でランチ・コーヒーブレイク
14:00 田畑での仕事
18:30 入浴・夕食 各農家で団らん・就寝

【3日目】

08:00 朝食
10:00 おじい・おばあと意見交換会
14:00 十津川温泉入浴
19:00 大阪梅田にて解散

【価格】 2万円

【宿泊】 農家民泊（10軒に分宿）

第2回プラン内容

実施日 2008年12月20日～21日

【1日目】

08:30 貸切バスで大阪梅田～現地へ
12:30 めはり寿司作り（昼食）
14:00 ウラジロ採り（散策）
15:30 しめ縄作り
18:00 夕食
20:00 星空観賞
21:00 各農家にて団らん

【2日目】

08:00 朝食・茶がゆ作り
10:00 しめ縄作り
12:00 餅つき
14:00 十津川温泉入浴
19:00 大阪梅田にて解散

【価格】 1万2000円

【宿泊】 農家民泊（10軒に分宿）

第4回プラン内容

実施日 2009年6月4日～7日

【1日目】

23:15 深夜高速バスで新宿～出発

【2日目】

08:05 奈良県五條市に到着
08:09 日本一長い路線バスで現地へ
14:00 畑での収穫作業（雨天のため
くくり櫛の内職に変更）

17:00 夕食の一品作りのお手伝い

19:00 夕食

21:00 各農家で団らん・就寝

【3日目】

08:00 朝食・茶がゆ、めはり寿司作り
11:00 世界遺産 熊野古道散策
16:00 十津川温泉入浴
21:10 五條 深夜高速バスで出発

【4日目】

06:15 新宿にて解散

【価格】 個人負担なし
（地元協議会とJRCで負担）

【宿泊】 農家民泊（10軒に分宿）



「都会生活に
疲れたビジネスマン」
プラン

全4回のモニター調査で
ありのままの魅力に開眼

子どもプランでの成功体験を受け、次に挑んだのは大人の受け入れ。地域からは「子どもはともかく、経験を積んだ大人に喜んでもらえるはずはない」と尻込みする

声も上がる。しかし実施してみると、「手を離しやさい」、「煮物などの日常食を子どもより喜んでくれる」など、メリットの大きさに気づく結果となった。

大人向けプランは計3回。回を重ねるうち、疲れた大人には、盛り沢山な体験より、農村ののんびりした時間そのものが魅力的なのでは？という仮説が浮かび、最後は本格的な体験は組み入れず、くつろぎ重視のプランを実施。実際、東京からの長旅を経て到着した参加者には、畳の上でただ昼寝する時間が人気だった。

雨天のため畑に出られず、急遽代案として行うことになったくくり櫛の内職が好評だったのも興味深い。「頑張るおばあを手伝う」気分が心に響いたのだろうか。モニター後の調査では多くの参加者が「おじい、おばあに会うためにまた来たい」と答えるなど、自然や景観以上に「人」に魅力を感じる傾向の強いことも明らかになった。



内職であるくくり櫛が都市生活者には新鮮。「上手」とほめられれば楽しさも倍増

モニターを終えて
ひと言！

【参加者から…】

- 「しめ縄作り」で作業の先生となってくれたおじいおばあとの対話于心地よかった
- 山の上で飲んだ「湧水コーヒー」に感動。あのひとは最高だった
- 一番の感動プログラムはくくり櫛の内職の手伝いの時間。おばあとの触れ合いが楽しかった
- 何の意図もない人の優しさに触れたことが最大のデトックス
- スケジュールに追われず、ゆったりと流れる時が心地よかった
- 2日目の後半からイライラすることが全くなり普段の疲れが消えている事を実感した
- 村の人の生活に触れられたこと。不便も多いが、丁寧な暮らしぶりに感動した
- 現地の皆さんが温かくて感動した
- 空気と水と人のあたたかさが何よりのご褒美旅となった
- ホームステイ風な感じが心を落ち着かせてくれた

【地元から…】

- 子どもたちは苦手だった野菜の煮物や漬物などを美味しい美味しいと食べてくれて嬉しかった
- 大人だが孫のようにかわいい
- 「年寄りだから…」という気持ちは捨ててもう一度やってみたい
- 若い人が来て家が明るくなった
- 子どもと違って大人は手が離せるから距離感がちょうど良い
- 普段通りの生活に孫が遊びに来たみたいで気が楽だった。内職をさせるなんて思いもよらなかったが、楽しい時間が嬉しかった



到着直後、長旅に疲れた表情を見せていた参加者も、爽やかな風の入る部屋で昼寝をするとスッキリと明るくなった

まとめ

日常・対話・少しの
清潔感が都市生活者の求める
癒しを生み、共感を呼ぶ



今回のプロジェクトの舞台となつた十津川村神納川地区では、当初は客の受け入れに対し、住民による抵抗も大きかった。しかし4回のプラン実施が地域の自信となり、ネガティブだった姿勢にも変化が現れた。一方で、モニター調査を通じ、地域側が意識すべきキーワードも見えてきた。

その一つが「日常」。今回人気があったのは、川遊び、しめ縄作り、くくり柿の内職など、過疎地の日常にあるものばかり。人を迎えるとなるとつい力が入るもの

が、特別な企画は不要。日常的なものであれば、提供側の住民が感じる負担も軽くなる。次に「対話」。

過疎地の高齢者は経験や知識に富んだ生活技術の達人。そんな高齢者との触れ合いが都会生活に疲れた参加者の心を癒し、心のよりどころとなる様うかがえた。もう一つは「少しの清潔感」だ。都市部と田舎暮らしのギャップが大き

く出るのは大半がこの部分。モニターアンケートでも「お風呂に浮遊物があった」「コタツ布団にご飯粒がついていた」など、清潔感

を気にするコメントも見られただけに気をつけたいところだ。

これらの点を踏まえた上で、地域の魅力に共感してくれる人にターゲットを絞って迎え、期待以上の満足感を感じてもらうことができれば、リピーター獲得への道も開けるはずだ。

今後取り組みを継続するにあたり、課題となるのは地域の負担の軽減。そのためには、1つの施設ですべて完結させるのではなく、受付、食事、風呂、土産などを地域で分業する考え方も有効だろう。

地域側が心がけるべき
3つのキーワード

- 1 日常 本来地域にないものを用意したり、観光客向けにわざわざ体験メニューを作る必要はない。
- 2 対話 お客様を迎えるのではなく、孫が遊びに来たようなつもりで受け入れるのがポイント。
- 3 少しの清潔感 清掃の徹底のほか、とくに気をつけたいのは水まわり。生活用品はすっきり整理整頓を。

担当
研究員より



じゃらんリサーチセンター
研究員
澤柳正子
旅行会社で企画・広報を担当したのち2002年（株）リクルートへ。2008年より現職に就き、旅づくり塾のファシリテーターや研究活動を進めている。

「地域サイズ」の目標で
無理せず楽しく前進を

国道を逸れ、住民以外通らない脇道の奥深くで暮らしてきた

集落に「人を呼んで地元を活性化しよう」という提案は、唐突で想像もつかなかっただろう。ゼロから始まった2年前を振り返る今、改めて地域を見渡すと、

明らかかな進歩がみられる。「住民同士で話す機会が増えた」「作物が増えた」「村を出た娘が週末帰るようになった」など、地域外からの客が出入りすること

で風景・空気・人が動き出し、地域機能が戻りつつある。当プロジェクトは、観光バスが押し寄せるような「観光地作り」を狙うものではない。この地には都市部と離れていたから

こそ残されたニッポンの原風景や温かな心がある。情報化社会の中でそれらを失った都市住民が、今その魅力に気づき出していることは、モニター調査から

確認できた。地域はとにかく無理をせず、自信を持って「今あるものを、ありのまま」提供することが大切。また各々の負担軽減のために分業を進める必要も見えてきた。テーマパークに

置き換えるなら、役割分担した食事場・宿泊場・土産物場などはパビリオンとなり、地域全体を周遊させることで、景色や人との出会いのきっかけともなる。

現在、集落の集客目標は月10〜20名。そのわずかなお客さんが地域に風をもたらし、次世代を担う住民の自信と課題につながることで、おのずと次の目標も浮かび上がってくるだろう。